

# ヴィリエ・ド・リラダンにおける 反リアリズムと転説法(2) —反リアリズム小説としての「夢に選ばれた人」

木 元 豊

## 0) 序論

筆者は拙論「ヴィリエ・ド・リラダンと転説法—反リアリズム小説としての『クレール・ルノワール』<sup>1)</sup>」において、ヴィリエ・ド・リラダン (Villiers de l'Isle-Adam, 1838-89) が1867年に発表し、1887年に大幅な改稿を施して短編集『トリビュラ・ボノメ』*Tribulat Bonhomet*に収録した、作者初の短編小説「クレール・ルノワール」*Claire Lenoir* が、反リアリズム小説として読解できることを論証した。また、その際に、ジェラルド・ジュネットが『物語のディスクール』において「転説法 (métalepse) <sup>2)</sup>」と定義した語り上の違反が、重要な働きを担っていることを明らかにした。

本稿で扱うヴィリエ晩年の短編小説「夢に選ばれた人」*L'Élu des rêves* においても、反リアリズムと転説法が強い結びつきを持っているが、「クレール・ルノワール」に比べて、リアリズム批判がより明示的であり、物語のメッセージにさえなっていることに特徴がある。この短編小説において、転説法とリアリズム批判がどのように関係しているのか、考察してみたい。

<sup>1)</sup> 『武蔵大学人文学会雑誌』第46巻第1号、武蔵大学人文学会、2014年10月、pp.588-542 (1-47) 所収。

<sup>2)</sup> ジェラルド・ジュネット、『物語のディスクール 方法論の試み』、花輪光、和泉涼一訳、書肆・風の薔薇、1985年、274-278ページ (Gérard Genette, « Discours du récit », *Figures III*, Seuil, « Poétique », 1972, pp.243-251) 参照。

## 1) 「夢に選ばれた人」における転説法

「夢に選ばれた人」は、1888年11月9日の『ジル・ブラス』*Gil Blas* 紙に発表された、1889年8月18日に亡くなることになる作者ヴィリエの、最晩年の短編小説の一つである。1888年11月13日出版の短編集『新残酷物語』*Nouveaux contes cruels* には間に合わず、作者の生前には単行本に収められることがなかった作品である。現在ではプレイヤッド版『全集』に収められており、本稿もこの版に依っている<sup>3</sup>。

物語の筋は以下の通りである。

1887年の11月、パリに出て来て間もない若い詩人、アレクシ・デュフレヌはラ・アルプ通りの学生の下宿となっている建物の6階の居室に、かつての同級生である、画家のJ・ブレアールと音楽家のウーゼーヴ・ネドンシェルを招いて、21歳の誕生日を祝って、ポンチを酌み交わしている。二人の友は次第に芸術論を戦わせ始めるが、アレクシは芸術論を無益なものと思っているので、議論には加わらない。ベッドの枕元に締め切りにされた扉があるが、錆びた掛け金がひとりでに外れて、少し前から隙間ができていた。その向こうから、かすかな光が漏れてきていて、議論の合間に、しわがれたうめき声が聴こえてくる。何事なのかを確認にいこうとするブレアールとネドンシェルの行く手を遮って、アレクシは物語を語る。すなわち、扉の向こうには、東洋の失われた王国の年老いた王がいて、彼の傍らには、ダイヤモンドや黄金の詰まった袋がおいてある。彼は王杖を握りしめ、物思いに耽ったままで、最期の時を迎えようとしている。だから、彼の最後の夢を邪魔してはならないのだと。ブレアールとネドンシェルは呆気にとられて、アレクシの言葉を聞いていたが、「この敷居を越えれば、君たちが才能を得ることは決してないだろう<sup>4</sup>」というアレクシの警告を無視して、二人は扉を開ける。そこは使用人用の裏階段の一番上の踊り場で、向かい側三段上には屋根裏部屋の戸が半開きになっていて、光とうめき声はそこから漏れている。戸を叩い

<sup>3</sup> Villiers de l'Isle-Adam, *Œuvres complètes*, édition établie par Alan Raitt et Pierre-Georges Castex avec la collaboration de Jean-Marie Bellefroid, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1986, tome II, pp.707-711 et pp.1605-1607. 以下、本書はO.C.と略す。

<sup>4</sup> *Ibid.*, p.708. 拙訳。強調は原文。傍点部は原文ではイタリック体。

でも返事がないので、二人は入ってみる。そこはひどい臭いのみすばらしい屋根裏部屋で、火の気のない暖炉の上に今にも消えそうな常夜灯がくすぶっている。明かり取りの天窗の下に、詰め物の藁が抜けた椅子が一脚、テーブルらしき影、小鉢が一つある。そして、最も奥まった暗がり粗末なベッドがあって、ぼろ着をまとった老人が屑屋の爪竿を握りしめて、死にかけている。この光景におじけづいた二人は、黙って扉を閉じ、アレクシの下に戻って来て、アレクシの見当違いを嘲るが、彼は取り合わず、夜も更けたので散会となる。ブレアールとネドンシェルが帰ったことを確認した上で、アレクシは彼らの不見識をひとり非難した後、気付け薬の体で、ポンチを一杯携えて、隣の老人を見舞う。アレクシが老人に声をかけると、瀕死の老人は起き上がって、ポンチを辞退した後、語り始める。アレクシの声で、さっき王様について語っていた人だと分かった。自分も夢に生きた男である。アレクシの物語は自分の最後の夢となった。ところで、毎夜街をさまよっていれば、夢をほとんど実現するだけのものを見つけることができるのだ。ご覧なさい。こう述べると、老人は彼の手の中で王杖のように輝く爪竿で、彼の粗末なベッドの布を引き裂く。すると、そこから、札束、宝石、金の巻物がいくつも現れる。老人は朝家に戻ると、この宝物を触りながら夢を見たものだと述べる。そして、アレクシを彼の遺産相続人に選ぶ。ただし、彼の二人の友とは決別するように忠告する。老人によれば、遺産は50万フランほどある。自分が死んだらこれを引き継いで、自分の夢を続けるようにとアレクシに言い残すと、老人は息を引き取る。今日、アレクシ・デュフレヌは、最も確実な金融取引によって、老人の遺産を五倍にして、インドは、ネパールのただ中の、『千一夜物語』の所領にある宮殿に住んでいる。二人の友のことは忘れて、インドの王様の暮らしをしている。一方、J・ブレアールとウーゼーヴ・ネドンシェルは相変わらずパリにいて、未来の作家たちが集う酒場に毎晩現れては、理論でもって、「常に物事を〈あるがままに〉見なければならぬ<sup>5)</sup>」と証明しようとやっきになっている。

<sup>5)</sup> *Ibid.*, p.711. 拙訳。強調は原文。原文では、傍点部はイタリック体。〈 〉は小型大文字。

以上が物語の大まかな内容である。

物語の最後に置かれたJ・ブレアールとウーゼーヴ・ネドンシエルの主張、すなわち「常に物事を〈あるがままに〉見なければならぬ」から、彼らがリアリズムの信奉者であることは間違いない。一方、アレクシ・デュフレーヌは、彼らと絶縁することを条件に、老人の遺産を相続するのであるから、本作品がリアリズム批判の書であることは疑い得ない。

老人とアレクシの方はといえば、両者とも、作者ヴィリエ・ド・リラダン自身を彷彿とさせる人物である。本作品は1888年11月、すなわち作者の死の9ヶ月ほど前の出版であり、当時病に臥せりがちであった作者が自ら死期を意識して本作品を認めた可能性は十分にある。作者の後半生は赤貧洗うが如しであり、プレイヤッド版編者の解説によれば、本作品でアレクシと老人の住んでいるラ・アルプ通りの6階は、当時作者自身の住んでいたピガル通りの5階によく似ているという<sup>6</sup>。カフェで、時には勘定書の裏を使って執筆し、ポケットを紙切れでいっぱいにしていた作者は<sup>7</sup>、作中の屑屋の老人と同様に、夜の街をさまよって、金を得ていたといえるかもしれない。とすれば、屑屋の老人の集めた宝とそれがもたらす夢と、作者が書き留めた言葉の集積と詩的夢想は、象徴的な関係に置かれることになる。

物語が1887年11月、つまり作品出版のちょうど一年前、アレクシの21歳の誕生日に設定されていることにも注目する必要がある<sup>8</sup>。作者ヴィリエは1838年11

<sup>6</sup> *Ibid.*, p.1607. なお、ラ・アルプ通りはセーヌ川左岸の学生街であるカルチエ・ラタンに実在する。ピガル通りは、右岸に位置し、モンマルトルへと向かう通りである。建物の最上階は、アレクシのような学生や、屑屋の老人のような貧乏人の住まいである。ヴィリエの生涯に関しては、とりわけ以下を参照。Alan Raitt, *Villiers de l'Isle-Adam, exorciste du réel*, Corti, 1987.

<sup>7</sup> *Cf. ibid.*, pp.323-324.

<sup>8</sup> 1887年8月18日には、ゾラの『大地』*La Terre*の出版に対してゾラの弟子たちが反発した「五人の宣言」*« Manifeste des Cinq »*が、『フィガロ』*Le Figaro*紙に掲載される。ゾラの自然主義の危機としてあまりに有名な事件だが、ヴィリエがこれに関心だったとは思えない。というのも、彼は当時、「五人の宣言」の起草者の内、リュシアン・デカーヴ(Lucien Descaves, 1861-1949)やギュスターヴ・ギッシュ(Gustave Guiches, 1860-1935)と親交があったからである。とりわけ、後者とはかなり親しくしていたようだ(Cf. Alan Raitt, *op.cit.*, pp.315-332)。ヴィリエとギッシュの親交に関しては、ギッシュの著作、*Au banquet de la vie* (Spes, 1925)と*Le Banquet* (Spes, 1926)に詳しい。「夢に選ばれた人」の構想とギッシュとの親交は無関係ではないかもしれないが、この点に関しては、本稿

月7日生まれであり、アレクシの誕生日は作者のものと同じなのである。しかも、まさにアレクシの誕生日に屑屋の老人が息を引き取ることを考え合わせると、老人からアレクシへの遺産相続はまさに命の授受、それも作者自身の命の授受の意味合いを帯びてくる。

ブレアールとネドンシェルがそれぞれ画家、音楽家とされているのに対し、アレクシは物語の冒頭から「詩人」と形容されている。周知のように、ヴィリエは詩よりも小説や戯曲の方を多く書いたが、自らを「詩人」とみなし、そう呼ばれることを好んでいた。アレクシは、ちょうど作者と同じように、芸術論を無益なものともなしている<sup>9</sup>。さらに彼は、二人の友が帰った後に、彼らのリアリズムを批判して、次のように述べる。

あの《想像の産物 (Imaginaire)》、それに合致するように人生に対して命じる術を心得ているあらゆる芸術家にとって、ただ唯一、現実であるあの《想像の産物》を侮って、彼らは、そこにあるものを見ることができると信じて、自らの感覚に判断を任せることを選んだのだ<sup>10</sup>！

この考えは、ヴィリエの読者にはなじみの思想、幻覚主義 (illusionnisme) と呼ばれる作者の信条を反映している<sup>11</sup>。このように、アレクシ・デュフレーヌもまた、老人と同様に、作者の姿を映し出す人物なのである。したがって、アレクシが老人の遺産相続人になるという物語は予定調和的であるといえるかもしれない。

しかしながら、アレクシが老人の遺産相続人に選ばれるのは、彼が二人の友の行く手を阻んで語る王の物語、財宝の詰まった袋を傍らに、王杖を握りしめて、孤独に死に行く王の物語にあることを忘れてはならないだろう。アレクシは老人

---

ではこれ以上追求しない。

<sup>9</sup> ヴィリエと美学、芸術論の関係については、とりわけ以下を参照。A. W. Raitt, *Villiers de l'Isle-Adam et le mouvement symboliste*, Corti, 1965, pp.43-60.

<sup>10</sup> O.C., t.II, p.710. 拙訳。強調は原文。原文では、傍点部はイタリック体、《 》の語は語頭大文字。

<sup>11</sup> ヴィリエにおける幻覚主義 (illusionnisme) に関しては、とりわけ以下を参照。A. W. Raitt, *op. cit.*, pp.245-264.

と会う前にこの物語を語っている。すなわち、これはアレクシの想像による物語なのである。アレクシの語る物語が特権的なものであることは、その全体がイタリック体に置かれて、「夢に選ばれた人」の物語全体から区別されていることから明白である。そして、先の引用にあるように、「《想像の産物》」こそが芸術家にとって唯一の現実であり、芸術家が「それに合致するように人生に対して命じる術を心得ている」ものであるならば、屑屋の老人の財宝はアレクシの物語が生み出したものといえるのである。

したがって、ここには転説法の例を認めることができる。ジェラルール・ジュネットによる転説法の定義は、以下の通りである。

物語世界外の語り手もしくは聴き手が物語世界の空間へ侵入すると（あるいは物語世界〔内〕の作中人物たちがメタ物語世界の空間に侵入すると、等）——あるいはコルターサルの場合がそうであるようにその逆であってもよい——、ある奇妙な効果が生じるということだ。それは滑稽な効果であることもあれば（スターンやディドロのように冗談めいた調子でそうした侵入が示される場合）、幻想的な効果であることもある。

われわれはとしては、この種の違反のすべてを示すために、**転説法**〔語りの**転位法** *métalepse narrative*〕という術語を用いることにしよう<sup>12</sup>。

アレクシは、「夢に選ばれた人」の物語世界内の人物である。この作中人物であるアレクシの語る物語内の瀕死の王とその財宝は、メタ物語世界内の作中人物であり、このメタ物語世界の作中人物が、物語の水準を侵犯して、アレクシが存在している物語世界に侵入することが、転説法を構成しているのである。

「夢に選ばれた人」の場合、老人はアレクシの存在する物語世界において、屑屋としてのアイデンティティを完全には喪失していない。しかし、彼は、アレクシの物語によって、屑屋であると同時に王となり、財宝が出現するのである。

<sup>12</sup> ジェラルール・ジュネット、前掲書、275ページ。強調は原文。

そして、苦しうに、彼 [=老人] は、彼の骨張った指の間で王杖のよう  
に輝いて見える、切っ先鋭い爪竿の先端で、彼の粗末なベッドの布を  
切り裂いた。ぎっちり束ねられたお札の束、宝石、金の巻物がいくつも  
現れた。

老人は屑屋の持ち物である「爪竿」を手放しはしないが、それは同時に「王杖」の  
ように見え、屑屋のベッドから王の財宝が現れるのである。したがって、アレク  
シのメタ物語世界から、アレクシのいる物語世界に、転説法によって侵入したも  
のとは、正確には財宝なのである。この財宝こそ、夢の、想像の産物であり、そ  
れゆえ、アレクシに正当に属するものなのである。マリー＝ロール・ライアン  
が「存在論的転説法」と名付ける「転説法」においては、二つの異なる物語世界と  
みなされるものが相互浸透を起こし、「想像の産物 (l'imaginaire)」と「現実 (le  
réel)」とを隔てる境界が根本的に問題に付されるという<sup>13</sup>。老人からアレクシに相  
続される財宝は、そのような「転説法」によって生じており、「夢に選ばれた人」  
の物語世界において「想像の産物」であると同時に「現実」なのである。

## 2) 「夢に選ばれた人」におけるリアリズム批判と語り手の曖昧な立場

上記のように、アレクシの想像による物語、夢の物語が現実化するというこ  
とが、「夢に選ばれた人」の主題であることは間違いなからう。では、この物語にレ  
アリズム批判がなぜ重要なのであろうか。J・ブレアールとウーゼーヴ・ネドン  
シェルはアレクシ・デュフレヌの単なる引き立て役に過ぎないのであろうか。

先述のマリー＝ロール・ライアンは、「語りの手法として、転説法はそれが侵  
犯する境界の存在を間接的に認めることになる<sup>14</sup>」と指摘する。実際、「夢に選ば  
れた人」において転説法が成立するためには、老人が現実には、アレクシの語る

<sup>13</sup> Marie-Laure Ryan, « Logique culturelle de la métalepse ou la métalepse dans tous ses états », *Métalepses. Entorses au pacte de la représentation*, sous la direction de John Pier et Jean-Marie Schaeffer, Éditions de l'École des Hautes Études en Science Sociale, 2005, pp.207-208.

<sup>14</sup> *Ibid.*, p.222. 拙訳。

物語の作中人物とは異なって、赤貧に喘ぐ屑屋に過ぎないと読者によって一度認知されておかねばならない。財宝は現実にはあり得ないと思われるところから、現れる必要があるのだ。したがって、ブレアールとネドンシエルは単なる引き立て役以上の重要な役割を担っているといえる。なぜなら、芸術家としての才能を失うことになるというアレクシの警告を無視して「現実」を確認に行くのはブレアールとネドンシエルの二人だからである。そして、「夢に選ばれた人」の語り手は、次の引用から見て取れるように、彼らと秘かな共犯関係を結んでいる。

扉を叩いても返事がないので、彼らは入った。

この薄暗く奥まった屋根裏部屋には、変な悪臭がして、屋根瓦は継ぎ目の石膏のところを外れていた。火も灰もない暖炉のようなものの上の縁で、今にもじりじりと音を立てて燃え尽きそうな常夜灯が灯っていた。みじめな星である。

屋根に穿たれた、突き上げ天窓と呼ばれる、明かり取り口の下に、詰め物の藁の抜けた椅子が一脚、テーブルらしき影、小鉢が一つある。——そして、奥まった所、あばら屋の中でも最も暗い所に、粗末なベッドが一台あって、物乞いのぼろ着をまとったたいへん年取った老人がいた。顔はほうけて、白く、——すでに《鬻骨》が透けて見えていて、——目は座り、死に瀕してぜいぜい喘いでいるようだった。——だらりと下げた右手には屑屋の爪竿を握っていた。むごたらしい極貧、共同墓地の前夜であった。どうしようもない。解放の時の鐘は今にも鳴ろうとしていた。

この光景におじけづいて、二人の若者は後ずさりした。——一言も発することなく、扉を閉めると、彼らは目を大きく見開き、鼻をつまんで、アレクシの部屋に戻って来た。

「君の帝王は、少々落ちぶれている [金箔がはげている] ようだね！」とJ・ブレアールはつぶやいた。——「君の大公は、少々鮮度が落ちていくようにだね！」とネドンシエルが続けた。

彼らは彼に [=アレクシに] 見て来たことを語って聞かせた<sup>15</sup>。

引用から分かるように、語り手は、老人の部屋の描写から始めて、老人の様子を語っているが、ここで語り手はブレアールとネドンシエルの二人に内的に焦点化して語っているのである<sup>16</sup>。なぜなら、証人はこの二人しかいないからだ。「むごたらしい極貧、共同墓地の前夜であった。どうしようもない。」とはまさに二人の感じたことであろうであろう。しかし、直接語法で語られた二人の言葉以外は、すべて全知の語り手によって引き受けられているのである。こうして、語り手はブレアールとネドンシエルという二人のリアリストを利用することで、最終的に転説法によって侵犯してしまう「想像の産物」と「現実」との境界を乗り越え難いものであるかのように措定するのである。

したがって、「夢に選ばれた人」の語り手の立場は曖昧であるといわざるを得ない。彼はリアリストではなかろう。なぜなら、「夢に選ばれた人」はリアリストの不見識を暴き、夢の力を言祝ぐ物語なのだから。しかし、そのためにも、ある種のリアリズムは乗り越えるべき、しかし必要不可欠の条件として、語り手に課せられているのである。リアリズムを意識しつつ、それを超える小説という意味において、「夢に選ばれた人」はまさに反リアリズム小説なのである。

### 3) 「夢に選ばれた人」の結末をめぐって

老人の死後、アレクシ・デュフレヌと彼の旧友たちの顛末を語る物語の結末部は、物語の他の部分から黒星印によって分けられている。その部分を以下に引用する。

今日、詩人アレクシ・デュフレヌは、最も確実な金融取引で、遺産を数ヶ月で五倍にして、インドは、ネパールのただ中の、『千一夜物語』

<sup>15</sup> O.C., t.II, p.709. 拙訳。

<sup>16</sup> 「焦点化 (focalisation)」に関しては、ジェラルド・ジュネット、前掲書、222-227ページ参照。

の所領の中心にある宮殿に住んでいる。忘れがちになっていて、二人の友のことさえも忘れて、そこでインドの王様の暮らしをしている。

J・ブレアールとウーゼーヴ・ネドンシエルは相変わらずパリにいる。二人とも高貴な「芸術理論家」として、未来の作家たちが足繁く出入りする酒場に毎晩遅くまで居座っては、理論でもって、「常に物事を〈あるがままに〉見なければならぬ」と証明しようとやっきになっている<sup>17</sup>。

この結末部にあるアレクシによる金融取引に関して、ベルトラン・ヴィベールは、以下のように、作者の自分自身に対するイロニーを読み取っている。

こうして、想像とは異なる方法で財産を「実現する」金融家詩人が出現したわけだ。まるで夢の宮殿とまさに空想のものとされる国の威光が、貨幣としての黄金によって手に入るかのように！ここにはそれに先行する箇所すべてとあまりにも明らかな矛盾があるので、イロニーに最も無感覚な読者でも、ヴィリエが自分自身を嘲笑していると、ある観点から見れば、自分自身のイロニックでない部分を嘲笑していると、要するに自分の創作を、パロディー化することによって、嘲笑していると気付くだろう。実際、相続人は彼の遺言者を裏切ったのだ。このおとぎ話 (conte de fée) は途方もない話 (conte à dormir debout) でもあるのだ<sup>18</sup>。

<sup>17</sup> *Ibid.*, p.711. 拙訳。強調は原文。原文では、傍点部はイタリック体。〈 〉は小型大文字。

<sup>18</sup> Bertrand Vibert, *Villiers l'inquisiteur*, Presses Universitaires du Mirail, Toulouse, 1995, p.324. 拙訳。強調は原文。ヴィリエの親友であったステファヌ・マラルメ (Stéphane Mallarmé, 1842-98) は、ヴィリエが金銭と詩的黄金を区別しなかったと指摘している (Stéphane Mallarmé, *Villiers de l'Isle-Adam, Œuvres complètes*, édition présentée, établie et annoncée par Bertrand Marchal, Gallimard, « Bibliothèques de la Pléiade », tome II, p.59)。マラルメにとって、両者の区別が本質的であったことは、周知の通りである。ところが、ベルトラン・ヴィベールは、ヴィリエにおいても両者が区別されていると、とりわけ戯曲『アクセル』*Axël* (1889) において、立証しようとしている (Bertrand Vibert, « L'Or du Verbe dans *Axël* de Villiers de l'Isle-Adam », *Recherches et Travaux*, Université de Grenoble 3, n°43, 1992)。この観点からすれば、「夢に選ばれた人」のアレクシの金融取引が非難されるものとなることは理解できる。一方、ジャック・ノワレは、『未来のイヴ』の序文においてエディソンに冠せられた「現代の伝説」という表現と、若き日のワーグナーを主人公とする短編小説「現代の伝説」*La Légende moderne* (短編集『奇天烈物語』*Histoires insolites*, 1888に収録) を関係付けながら、ヴィリエにとっての

たしかに、アレクシの「金融取引」をめぐる、イロニーを読み取ることは不可能でないかもしれない。ヴィリエがブルジョワジーの容赦のない批判者であったことを思い起こせば、この金融取引には多くの読者が驚きを禁じ得ないだろう。

しかし、もしこの箇所にもイロニーを読み取るとすれば、この箇所にも先立つ物語において、転説法によって無効にされた「想像の産物」と「現実」との境界を、新たに引き直すことになるのではないか。「想像の産物」としての財宝が、同時に「現実」の黄金であることを示すのに、金融取引ほど現実主義的な、つまりリアリストな方法があるだろうか。アレクシのいる世界、すなわち「夢に選ばれた人」の物語世界においては、「想像の産物」は、リアリストにとっての「現実」とさえ合致したのである。そこでは夢見る人は同時に現実的なのである。だから、現実には『千一夜物語』の世界に住めるのである。アレクシは老人を裏切っていない。なぜなら、遺言通り、二人の友を忘れ、二人のいるパリを離れて、夢の国で王の暮らしをしているのだから。

一方、ブレアールとネドンシエルの二人は、常に「想像の産物」と「現実」の間に自ら境界を設け、「現実」の側に留まるように、自ら制限をかける者なのである。それゆえ、彼らはパリで相変わらずの暮らしを送るしかないのである。ヴィリエの見るリアリストとはこのように、自らに自ら制限を課する者に他ならない。

金融取引に関していえば、ヴィリエがそれをどこまで現実的だと思っていたかは分からない。むしろ、その虚構性を強く意識していた可能性がある。というのも、『未来のイヴ』*L'Ève future* (1886) の第6部第3章において、発明家エディソンの健康状態をめぐる噂によって引き起こされる株の下落と高騰を描いた後に、作者は次のように結んでいるからだ。

最も賢明な事業が、工業と経済活動と発明に拠って立っている国においては、こうした出来事ほど自然なことはないのだ<sup>19</sup>。

「現代の伝説」とは、「貧窮の試練の後に、天才が全世界的に認知されること、ブルジョワ社会によって、門外漢によって、金権家層によってさえも」という興味深い指摘をしている (Jacques Noiray, « *L'Ève future* » ou le laboratoire de l'Idéal, Belin, 1999, p.57)。

<sup>19</sup> Villiers de l'Isle-Adam, *L'Ève future*, édition présentée, établie et annotée par Alan

もし金融取引もまた、物語に依拠しているとするならば、アレクシは金融取引をしてもなお、物語の支配者であるから成功するのではないか。だからこそ、物語の結末部において、アレクシ・デュフレーヌは改めて「詩人」と形容されているのではないか。「夢に選ばれた人」において、詩人とは、「想像の産物」に合致するよう、「人生」に命じることのできる者、人生という物語ないしは夢の支配者、王なのである。

しかし、夢の王であるアレクシは夢の国に旅立ってしまい、もはや「忘れがち」になっている。パリにいる彼のかつての友のことを思い出す者は、語り手しかない。だから、語り手は最後まで曖昧な立場に留まるのである。彼は「リアリスト」ではないが、完全に「詩人」でもない。彼は「リアリスト」のようにこちら側に留まりながら、「夢の王」である「詩人」の物語を語る使命を帯びているのだ。作者ヴィリエはこの点にきわめて意識的であったはずである。

#### 4) 結論

ヴィリエ・ド・リラダンの最晩年の短編小説「夢に選ばれた人」は、彼の最初の短編小説「クレール・ルノワール」と同様、反リアリズム小説とみなすことが可能である。そこでは「転説法」が用いられて、「想像の産物 (l'imaginaire)」と「現実 (le réel)」を隔てる境界が侵犯され、物語世界とメタ物語世界が融合されるが、この境界侵犯のためにも、「現実」の境界を設定しようとするリアリズムは、批判の対象であると同時に、必要不可欠な踏み台なのである。筆者がこれらの作品を反リアリズム小説と呼ぶのはそれゆえである。

「クレール・ルノワール」においては、序論で言及した拙論で見たように、登場人物でもあり、語り手でもあるトリビュラ・ボノメが「現実」の境界を設定しようとして、自ら「現実」と「想像の産物」の境界を見失ってしまう。「夢に選ばれた人」では、「現実」の境界を守ろうとする登場人物、J・ブリアールとウーゼーヴ・ネドンシエルが否定され、「現実」を「想像の産物」に合致させる登場人物アレク

---

Raitt, Gallimard, « Folio », 1993, p.292. 拙訳。

シ・デュフレーヌが、「詩人」すなわち物語の支配者、夢の王として、聖別される。しかし、語り手は、「詩人」の物語を語るという行為において、曖昧な立場に留まることになる。そして、この曖昧な立場は、語り手としてのトリビュラ・ボノメに通じるものであり、ヴィリエ・ド・リラダンの作品、とりわけ小説作品を理解する上でたいへん重要な点であろう。

違反は規則なしには成立し得ない。ヴィリエにおいて違反の価値が重要であることはすでに指摘されているが<sup>20</sup>、規則の確認と違反とを同時に行うというヴィリエ・ド・リラダンの小説作品の戦略を解明していくのに、反リアリズムという観点は今後も有効であるだろう。

---

<sup>20</sup> Cf. Jean-Paul Gourevitch, *Villiers de l'Isle-Adam ou l'univers de la transgression*, Seghers, « Écrivains d'hier et d'aujourd'hui », n°35, 1971.

